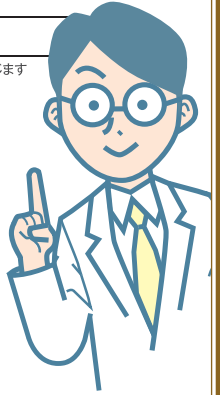


農林水産技術こども新聞

〒100-8950 東京都千代田区霞が関 1-2-1 農林水産省 農林水産技術会議事務局 <https://www.affrc.maff.go.jp/>

本紙記事、写真などの無断転載、複製を禁じます



暑さに負けないダリア 研究の花開く



一般のダリア(左)は花びらがしおれてきていますが、小野崎さんが品種改良でつくったダリア(右)は8日たってもピンク色の花がきれいに咲いています＝農研機構提供



ダリアを育成している研究農場＝農研機構提供

「ダリアといえば、みなさんはどんな花をイメージしますか？」華やかでインパクトのあるふんいきはとも目を引きますが、花の日持ちが短いことが大きな悩みでした。そんなダリアの日持ちを長くしようとチャレンジしている研究者がいます。

日持ちの短さを解決するには？

7月上旬、茨城県つくば市にある農業・食品産業技術総合研究機構(農研機構)の野菜花き研究部門の拠点を訪れると、花き遺伝育種研究

領域の品質育種ユニット長をつとめる小野崎隆さんがむかえてくれました。小野崎さんは長年、花の育種について研究しています。ダ

リヤの品種改良を重ね、日持ちがこれまでのおよそ2倍に長くなった3種類の新しいダリアをつくることに成功しました。

ダリアは初夏から楽しめるのですが、とくに秋に見ごろをかえます。近年は結婚式のさり付けなどとしても人気が高まっています。

しかし、せっかく花を買っても、すぐしおれてしまうと、がっかりします。「日持ち」は

消費者が花を選ぶときのポイントのひとつです。「ダリアは切り花にすると、1週間持てばいいほうです。日持ちが短いことが最大の欠点でした」と

小野崎さんはいいます。そこで、夏の暑さに負けないダリアをつくろうと、農林水産省の研究プロジェクト「国産花きの国際競争力強化のための技術開発」(2015～19年度)のテーマのひとつとして取り組みが始まりました。

小野崎さんが用いたのは、花と花をかけ合わせ、人工的に父親の花粉を母親のめしべにかけて、種を交配させる「交雑育種法」という方法です。

「黒蝶」や「かまくら」「ミツチャン」といった22品種のダリアを親にして、さまざまな組み合わせで交配を始めました。とれた種をまいて育て、夏の暑い時期に長持ちする個体を選んではその長持ちする個体間でかけ合わせるという作業をくり返し、品種の改良を重ねていきました。

6年がかりの研究で日持ち2倍に

小野崎さんが用いたのは、花と花をかけ合わせ、人工的に父親の花粉を母親のめしべにかけて、種を交配させる「交雑育種法」という方法です。

「黒蝶」や「かまくら」「ミツチャン」といった22品種のダリアを親にして、さまざまな組み合わせで交配を始めました。とれた種をまいて育て、夏の暑い時期に長持ちする個体を選んではその長持ちする個体間でかけ合わせるという作業をくり返し、品種の改良を重ねていきました。

「もっと長持ちするダリアを育成したい」。そう話す小野崎さんはさらに研究を深めていく予定です。

こうして、暑さに強く、長持ちする3種類の新しいダリアが6年がかりの研究で誕生しました。水に生けて長いもので12日間、品質保持剤を使って約13日間、花がきれいなまま日持ちしたといえます。去年、ダリアの生産がさかんな秋田、奈良を始め、高知、宮崎の4県にある農業試験場に苗を送って育ててもらい、同じように長持ちしたこ



まだまだ研究を続けます!

小野崎隆さん